Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-26

M・ホルクハイマーにおける批判的理論の形成と展開 : 道具的理性批判への道

山本, 楓真

(Citation)
国際文化学,38:95-119

(Issue Date)
2025-03-18

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100493603

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100493603

KOBE UNIVERSITY

M・ホルクハイマーにおける批判的理論の形成と展開

—道具的理性批判への道—

The Formation and Development of M. Horkheimer's Critical Theory

—The Road to Critique of Instrumental Reason—

山本　楓真
YAMAMOTO Fuma

Summary

The aim of this paper is to clearly distinguish the changes and continuities in Max Horkheimer (1895-1973)'s thought as his Critical Theory was formed and developed. Specifically, this paper will see how the methodology formulated in his critique of positivism and metaphysics (Traditional Theory) in the 30s was applied and reshaped in his Critique of Instrumental Reason in the 40s.

First, this paper will reexamine several existing theories of the changes in Horkheimer's thought and point out the problems they overlook (Section II).

From there, this paper reorganizes Horkheimer's works from the 30s to the 40s into three periods (1930s, early 1940s, mid 1940s), before it reexamines them in context. As a result, it becomes clear why Critical Theory needed to change the focus of its critique from Traditional Theory to Instrumental Reason (III, IV, and V). In particular, Section V will engage with *Dialectic of Enlightenment* (1944/47) and *Eclipse of Reason* (1947), revealing two significant points: First, Horkheimer sees in "language" the possibility that Instrumental Reason can be criticized. Second, for him, philosophy is an effort to create a linguistic structure that achieves the adequation of name and thing.

Finally, based on the findings from the previous sections, this paper concludes (Section VI) by demonstrating that, although Horkheimer's Critical Theory shifted its focus of critique from the 1930s to the 1940s, it consistently aimed to preserve the historical subject.

キーワード
M・ホルクハイマー、批判的理論、伝統的理論、(道具的)理性、言語

【目次】

I はじめに
II 先行研究と本稿の立場
2.1 先行研究
2.2 本稿の立場と課題
III 1930 年代：伝統的理論に抗する批判的理論
3.1 ホルクハイマーの問題意識
3.2 伝統的理論
3.3 批判的理論
IV 1940 年代①：過渡期の哲学
4.1 哲学の社会的機能
4.2 理性の可能性
V 1940 年代②：理性批判
5.1 哲学の危機
5.2 道具的理性
5.3 「ここといま」の哲学
VI おわりに
注
参考文献

I はじめに

本稿の目的は、マックス・ホルクハイマー(Max Horkheimer, 1895-1973)が定式化した「批判的理論」が形成され、展開していく中で彼の思想に生じた「変化」と「連続」を腑分けすることで、彼の哲学の中で一貫して保持されている思考モチーフを解明することである。具体的には、1930 年代の彼による実証主義と形而上学(=伝統的理論)への批判の中で定式化された批判的理論が、1940 年代の道具的理性批判に応用され、変化していくプロセスを見ていく。そのさい参照する文献は、ホルクハイマーによる 30 年代の諸論考から、Th・W・アドルノとの共著『啓蒙の弁証法』(*Dialektik der Aufklärung*, 1944/47)[1]および『理性の腐蝕』(*Eclipse of Reason*, 1947)[2]までとする。

1931 年にホルクハイマーがフランクフルト社会研究所の所長に就任して以来、この研究所に集まった数多くの知識人によって、哲学、社会学、心理学、認識論などを融合させた理論的研究が盛んに行われた。その中でも哲学的著作において特に傑出した成果を提出したのは、ホルクハイマーやアドルノをはじめとするフランクフルト学派、いわゆる批判理論の第一世代と呼ばれる人々であった[3]。彼らの思考の歩みは、第二次世界大戦後のドイツ

思想を牽引したのみならず、彼らの後継者であるJ・ハーバーマスやA・ホネットといった、現代でも哲学のみならず他分野にも強い影響を与え続けている思想家、いわゆる第二世代以降にも受け継がれている[4]。

しかし第二世代以降、ホルクハイマーを研究する者の多くは、ホルクハイマーら第一世代の知的成果を全面的に継承することはなかった。むしろ、彼らは第一世代による仕事の数々の批判的超克を眼目とする。彼らの多くは、40 年代のホルクハイマー哲学というのは、自らの思考を根本から支えてきた概念である「理性」を徹底的なまでに批判しつくすことで、30 年代まで自分たちが行ってきた研究の理論的地盤ごと掘り崩してしまったと指摘している。そのため、ホルクハイマーを研究するためには、30 年代の思想と 40 年代の思想を明確に区別して扱わねばならないとされることが常である。

しかし、本稿はこうした指摘に完全に与する立場ではない。むしろ、ホルクハイマーは 30 年代から 40 年代にかけて、思考様式の変化だけでなく連続の側面も見られる。そのことを先行研究の再構成によって指摘し、本稿での課題をさらに明確にする(第 II 節)。そして、当時のホルクハイマーが抱いていた問題意識を確認した後、改めて伝統的理論およびそれに対置される批判的理論を概観し(第 III 節)、それをふまえて 40 年代初頭の諸論考に依拠することで、ホルクハイマーが伝統的理論から理性概念へと、その批判の矛先を変えていく様子を辿っていく (第 IV 節)。そして、『啓蒙の弁証法』および『理性の腐蝕』の解釈から、理性批判というホルクハイマーの方法論を正当化する可能性を、彼が(アドルノとともに)著作の中で言及している「言語」の観点から探る(第Ⅴ節)。最後に、改めてホルクハイマー哲学が 30 年代から 40 年代にかけてどの点で変化もしくは連続しているのかを明らかにすることで、彼の哲学の中で一貫している思考モチーフを提示する。(第Ⅵ節)。

II　先行研究と本稿の立場

2.1 先行研究

40 年代の代表的著作である『啓蒙の弁証法』や『理性の腐蝕』が中心的に論じられるとき、必ずといってよいほどこれら著作は、30 年代に執筆された『社会研究誌』(*Zeitschrift für Sozialforschung*, 1932-1941)上のいくつかの論考と比較検討される。そのさい多くの研究者が直面する困難は、30 年代のホルクハイマー哲学がどこまで『啓蒙の弁証法』まで継承されているのか、という点に集約される。そのため、『社会研究誌』時代から『啓蒙の弁証法』および『理性の腐蝕』を執筆した時代にかけて、どの点でホルクハイマーの思考様式が変化しているのかということが議論の中心になる。ゆえに、本稿の課題とその意義をはっきりさせるためにも、30 年代から 40 年代におけるホルクハイマー哲学の変遷に関する先行研究をいくつか概観しておく必要がある。

まず、30 年代から 40 年代にかけてのホルクハイマー哲学の変化にとりわけ光を当てている先行研究を概観していく[5]。30 年代ホルクハイマーの思想は、(3.1 で詳細に論じるが)マルクスによる弁証法的唯物論とフロイト心理学を基盤に、社会学や経済学、法学といった経験諸科学と哲学の統合を試みる「学際的唯物論」(Habermas 1985a, 516)[6]に最大の特徴がある。それに付随して、30 年代ホルクハイマーは、社会を科学的手法によってでしか認

識しようとしない実証主義に対する批判と、思弁的認識を重視しすぎる形而上学に対する批判を同時に展開する中で「批判的理論」を構想した。ここまでは種々の先行研究も共通しているホルクハイマー理解である。しかし、ハーバーマスによれば、40 年代ホルクハイマーは、30 年代の自らの取り組みから一転して、学際的唯物論および批判的理論を基礎づけてきた理性にこそ問題があると考えるようになる。そして、自らの思索の基盤であった理性概念を理性による批判で乗り越えようとする。しかしこの方法は、批判された理性でしか理性批判を叙述できないという「遂行的矛盾」に陥っている(cf. Habermas 1985, 144-145)[7]。つまり、40 年代ホルクハイマーは、市民的思想を支えてきた理性によって哲学と諸科学を統合するという「楽観主義」(Lohman 1993, 387)から決別し、批判の矛先を理性に向けるというラディカルな思想の変化によって、「理性による理性批判」という袋小路に入り込んでしまった。ハーバーマスおよびその他の先行研究は、こうしたホルクハイマー哲学の後退に変化を見ている[8]。

それに対し、30 年代から 40 年代にかけてホルクハイマー哲学の中で維持されたものを強調する先行研究の多くは、ハーバーマスの解釈を引き受けた上で、「維持」か「変化」という単純に二極化された見方から距離を取ろうとする[9]。彼らの主張を敷衍するならば、たしかにホルクハイマー哲学の根底にあるモチーフの一部にはたしかに変化が認められるものの、それでもある一定の意味で解すならば、彼の思想は、30 年代から少なくとも『啓蒙の弁証法』が執筆された 40 年代中盤までは維持されている。以下では、数ある先行研究の中から、本稿で扱いうるものをいくつか挙げていくこととする。

例えば、G・シュヴェッペンホイザーによる分析を見ていく。彼によれば、ホルクハイマーは 1941 年といういわゆる批判理論中期の変遷の中で、市民的だと批判してきた伝統的理論どころか、自らの理論が依拠してきたマルクス経済学でさえ市民的な思想に端を発するものであることに自覚的になる。そのためホルクハイマーは、マルクス理論からは距離を取り、それとは異なる根を持つ、別の理論的な枠組みが必要であると考えるようになる(cf. Schweppenhäuser 2023, 94-97)。しかし同時に、シュヴェッペンホイザーは、30 年代から 40 年代までのホルクハイマーが維持していた哲学的関心を次のように定める。すなわち、彼は、現実を支配する諸矛盾を概念的に再構成することで、社会における対立諸関係を一貫して分析することに関心をいだいていた (cf. Schweppenhäuser 2023, 89-94) 。

またA・デミロヴィッチは、ホルクハイマーによる「学際的唯物論」は 30 年代までに挫折してしまった点でハーバーマスと見解を同じくしている。ただし、その理由として彼は、ホルクハイマーが理性の形式を根底から変化させてしまう技術的合理性としての分業の存在を考慮しきれていなかったからであると述べる。つまり、30 年代ホルクハイマーは、分業という労働形態に理性的社会の理想形を見ていたが、40 年代になると、この分業それ自体に理性の道具化の影を見ることとなり、批判の対象とする。しかし同時に、デミロヴィッチは、ホルクハイマーが 30 年代に掲げた理論的知識の体系化を達成するための理論的努力のひとつの成果物として、『啓蒙の弁証法』が執筆されたのだと述べる(cf. Demirović 2019, 190-195)[10]。

2.2 本稿の立場と課題

本稿は、学際的唯物論と批判的理論が定式化されている 30 年代の諸論考を解釈することから始め、理性概念について詳細な検討をしている 40 年代の諸論考の解釈へと進んでいく。そして、最終的に上記の先行研究の是非を検討することを通じて、ホルクハイマー哲学の中で一貫して保持されている思考の枠組みを提示する。また、本稿は論考「伝統的理論と批判的理論(Traditionelle und kritische Theorie, 1937)」[11]を中心に検討していくことになるが、この論考の解釈は、それ以前に執筆された著作からなされる。というのも、その是非はともかく、40 年代以降のホルクハイマーの著作から 30 年代の思想を診断するという一種のアナクロニズムを生じさせている研究が多く、ある意味で「純粋に」30 年代の著作が読まれるということがなされていないからである。ホルクハイマーの思想がどの点で変化し、維持されているのかという問いについて、その解答を分かつのは、彼の著作に現れる思考様式のどの部分を強調するかによって完全に左右されるのは言うまでもない。ただ、後に詳述するが、ホルクハイマーは 30 年代から一貫して「哲学」と「理性」の社会的機能を探求し続けており、その成果は 40 年代の諸著作に集約されていると見ることができる。彼の思想を「変化」もしくは「連続」という二元論的な見方をしても、彼の多岐にわたる知的活動の成果の多くを取りこぼすだけである。

このことを踏まえたうえで本稿は、とりわけホルクハイマーにおける批判対象の変遷に着目することで、30 年代の彼の思想が 40 年代にかけて展開していく、そのプロセスの一端を明らかにする。そのさい本稿が主として光を当てるのは、形而上学と実証主義に対する 30 年代ホルクハイマーの同時批判である。本稿では、彼のこうした同時批判のモチーフが 40 年代にかけていかなる役割を果たしていたのかを考察する中で、ホルクハイマー哲学が伝統的理論の批判をめぐる問題を 40 年代にかけて実証主義的な「言語(Sprache)」批判の問題へと深化させていることを明らかにする。

III 1930 年代：伝統的理論に抗する批判的理論

以下では、論考「伝統的理論と批判的理論」を中心に、ホルクハイマーによる哲学的方法論である「批判」の内実を解明していく。というのも、ホルクハイマーに関する数々の先行研究も指摘しているように[12]、この論考は、複雑多岐な 30 年代ホルクハイマーの思索を総括した、一つの報告書としての役割を果たしているからである。ただし、この論考を解釈するにあたっては、前述したように、30 年代ホルクハイマーに与えた数々の知的影響を考慮するため、適宜 37 年以前の論考を参照することとする。

3.1 ホルクハイマーの問題意識

ホルクハイマーは、社会を対象とする研究を遂行するべく、フランクフルト社会研究所で行われた所長就任講演「社会哲学の現状と社会研究所の諸課題」(Die gegenwärtige Lage der Sozialphilosophie und die Aufgaben eines Instituts für Sozialforschung, 1931,以下では「所長就任講演」と略記)で、社会および労働者を分析するマルクス哲学を指導的立場に据えた上で、社会学や国民経済学、さらには歴史学やフロイト心理学といった、経験的認

識を出発点とする社会科学の諸分野による学際的研究の重要性を強調した(cf. GS3, 29)。ホルクハイマーにとって、社会それ自体に定位してなされる諸科学の方法論と経験的認識を絶えず連関させることは、自らが構想する哲学理論の必須条件であった。というのも、F・ハルトマンが述べるように、ホルクハイマーから見れば社会の変化は現実の変化であり、それに対応するべく理論は、常に自らと経験された現実の内容的なズレを修正せねばならないからである(cf. Hartmann 1990, 203)。

しかし、こうしたホルクハイマーの学際的唯物論の構想は、論考「伝統的理論と批判的理論」では疑問に付されることになる。ここで問題となるのは、学際的唯物論の骨格をなす、学問の分業的性格である。

> 物理的な自然を扱うにしても、一定の経済的、社会的メカニズムを扱うにしても、諸仮説の順序立った一つの組織という形で与えられているような知識素材の形成が要求されている。市民時代の技術的進歩は、学問経営のこうした機能と不可分の関係にある。学問経営によって、一方では事実が、所与の状況の下で利用可能な知識を得るために役立てられるとともに、他方では手持ちの知識が、事実に適用される。(GS4, 168)

たしかに学際的唯物論プロジェクトにおいて目指されたのは、国家・法・経済・宗教といった、人々の生活領域に根ざす諸文化を生み出す社会的メカニズムを解明することであり、その中で主体が自らの思考および社会を変革する可能性を模索することであった(cf. GS3, 33)。だが、彼はこのプロジェクトの中で扱われるものが単なる事実でしかないことを問題視するようになる。学際的唯物論において諸科学は、所与の事実を自らの知識素材を増やすための道具とし、事実を記述するべく自らの知識をそれぞれ別の科学に提供する。そして、こうした現在の諸科学の方法論は市民時代の技術的進歩を促すためになくてはならないものである(cf. GS4, 168)。しかしホルクハイマーは、専門諸科学が分業的にそれぞれ事実を記述し、それらを統合させることで、一つの組織化された知識素材の集合体を形成する「学問経営(Wissenschaftsbetrieb)」による分析では、主体による社会の変革という、所与の事実を超えた出来事の可能性を提示できないと考えた。ホルクハイマーは、こうした学際的唯物論に対する問題意識から、社会批判のポテンシャルを市民社会の技術的進歩を支えてきた「労働」概念の分析から明らかにしようと試みる。

ただし、少なくとも 37 年のホルクハイマーは、学際的唯物論の理念を完全に放棄したわけではなかった。事実、この世界の主体は労働疎外に陥っており、マルクスがかつて期待していたような、労働者自らが社会を変革するための力は失われている。しかし、ホルクハイマーはこうした状況だからといって、主体による社会変革の可能性を放棄することはない。むしろ彼によれば、「理性的〔vernünftig〕[13]社会という目標」(GS4, 224)は、窮乏の時代である現代になおも保存されている。そしてこの目標(理念)は、現在の我々の目にはそう映ってはいなくとも、すでに人間の労働に内在している(cf. GS4, 186-187)。

また、ホルクハイマーが労働を分析するときに着目したのは、労働主体および彼らを取り巻く歴史であった。ただし彼にとって歴史は、形而上学における一定不変な絶対者や、実証主義者が扱うような、単なる事実の集積としての体系、すなわち静態的(statisch)なも

のなどではない。そうではなく、この歴史は、自己保存の欲動に突き動かされる人間の心的諸力[14]と、個々人の利害関心(Interesse)に突き動かされる社会の生産諸力[15]とが複雑に絡み合いながら展開していく、動態的(dynamisch)なものとして理解される。つまり、ホルクハイマーにとって歴史(Geschichte)というのは、単に事実を記述するだけの歴史学(Historie)ではなく、心的諸力と生産諸力の絡み合いがそのつど生み出す一つの出来事である。そのため、この歴史に絡めとられている主体もまた、静態的ではありえず、常に内的外的な変化を伴う動態的な存在、つまり歴史性を内に保持する存在である(cf. GS4, 197; 224)。それゆえ、主体の問題と歴史の問題は同時に考えられねばならない。

以上の議論をまとめよう。すなわち、30 年代ホルクハイマーが抱いていた問題意識というのは、学際的唯物論プロジェクトで目指された、学問的分業としての学問経営にある。ここで特に問題となるのは、扱うべき対象を一つの非歴史的な事実として記述することで、その対象に存する歴史性を排除してしまうような経験諸科学の態度である。学問経営を続ける限り、主体および社会がその対象になるや、それらは単なる事実の下に包摂されるだけで、そこから現実の主体による社会変革のポテンシャルを見て取ることはできない。つまり、包摂的な諸科学の中で失われた歴史的な主体をどのようにして諸科学から取り戻すのか、これが 30 年代ホルクハイマーの問題意識である。この問題意識を前提に、以下では、ホルクハイマーが批判する伝統的理論の内実を明らかにする。

3.2 伝統的理論

ホルクハイマーによれば、伝統的理論は「科学の普遍的体系」を目標とする(cf. GS4, 162)。そこで彼が具体的に批判するのは、互いに反目し合いながらも、両者とも共通して思弁的なロゴスを現実として実体化させようとする、実証主義および形而上学の態度である(cf. GS4, 166)。つまり、経験的実在から超時間的な最高原理を導出しようとする形而上学としての(ドイツ)観念論、そしてこうした態度を非合理的かつ形而上学的であると攻撃しながら、一般化された命題によって構成された無矛盾な世界にしか配慮することがない(論理)実証主義、この両者の学問的態度をホルクハイマーは批判する。

まず、ホルクハイマーの叙述にしたがって形而上学の実状を見ていく。論考「ヘーゲルと形而上学の問題」(Hegel und das Problem der Metaphysik, 1932)では、論考全体を通して、形而上学の完成者たるヘーゲル哲学の難点を指摘し、彼の哲学を乗り越えることの意義とその困難さが述べられる。ヘーゲル哲学の要諦は言うまでもなく彼の哲学的方法論である弁証法にあるのだが、ホルクハイマーによれば、ヘーゲルの弁証法は「完結した〔vollendet〕自己認識の体系という理念」(GS2, 297)を保持している。この理念の下でヘーゲルは、歴史「それ自体」を追求するのだが、ホルクハイマーによれば、彼の哲学で常に前提とされているのは、ある特定の人間の思考だけであり、それだけが社会全体に適用されることで歴史は進歩していく (cf. GS2, 301)。この点にホルクハイマーは形而上学の欺瞞を見る。すなわち形而上学にとっての欺瞞は、真理そして理性というものが存在するのならば、それらは形而上学的思考によって特定の個人から非歴史的な絶対者へと自己完結的に上昇していくと考える態度である。こうしたホルクハイマーによる伝統的な形而上学への 32 年の見方は、37 年にはその対象をカント、さらには新カント派まで拡大しつつも一

貫している(cf. GS4, 171-172; 176-178)。

では、実証主義はどうなのか。論考「形而上学への最新の攻撃」(Der neueste Angriff auf die Metaphysik, 1937)では、実証主義にとっても問題なのはやはり、自身の体系を完結したものとみなす点にあるとされる。彼らは実証的に対象を操作するために世界の言語化を要求する。ただし、ここで言われる「言語化」というのは、「所与のもの」を記号化し形式的に扱う命題によって世界を表現することである。R・カルナップやL・ウィトゲンシュタインをはじめとする(論理)実証主義者にとって世界とは、論理記号および論理結合子からなる命題によって固定され、その中でのみ完結しているような数学的世界である(cf. GS4, 118)。この考察を踏襲する形で論考「伝統的理論と批判的理論」で指摘されるのは、実証主義は、観察によって手に入れたトートロジーな命題を自らの経験則の中で変形し、新たなトートロジーな命題を導き出すことで、自らの理論をより完全なものにしようとする点である(cf. GS4, 162-163; 167-168)。つまり、科学の体系について真偽を下す理性は、命題の諸要素に存する歴史性を考慮することなく、この諸要素が一義的な意味を持つようにそれら要素を次々と論理的カテゴリーに分類していく。この意味で「理性は悟性としてしか存在しない」(GS4, 130)のである。

つまり、ホルクハイマーが述べる伝統的理論の特徴は、自身の体系を「非歴史的」かつ「完結的」とみなしている点にある。この理論においては、社会構造のなかにある個々の事物の特殊性が考慮されることはない。そして、社会と主体の利害関心がぶつかり合う中で生じる矛盾や対立は絶対者に向けて止揚されるか、無矛盾な体系の中で記号化され計算されるかのいずれかしかない。概念というものを歴史的かつ外的な社会状況に応じてそのつど基礎づけることを拒絶する態度、そして概念というのは総じて認識の内的本質に従って非歴史的に基礎づけうるという態度は、やがてその概念そのものを、物象化された、イデオロギー的なカテゴリーに転化させることになる(cf. GS4, 168)。こうした欺瞞的態度に満ちた理論こそ、ホルクハイマーが述べる伝統的理論である。

3.3 批判的理論

ホルクハイマーにおける批判的理論の内実を解明する前に、彼が対象一般を批判するとき、その行為がどのような態度(Verhalten)の下でなされているのかを明らかにしておく。

> ところで、社会それ自体を対象とする人間の態度が存在する。これらが目指すのは、何らかの障害を除去することには限らない。むしろこの態度にとってこうした障害は、社会構造のあらゆる組織と必然的に結びついたものとして姿を見せる。こうした態度は、社会構造から導出される。しかし、その意識的な意図もしくは客観的な意味からいっても、この構造の中の何かをさらにうまく機能させようという目的に関係づけられてはいない。(GS4, 189)

ホルクハイマーは、批判的な態度を端的に「社会それ自体を対象とする人間の態度」とする[16]。ホルクハイマーが何かしらの対象を批判するさい、そうした態度は、社会の中に潜む障害、つまり唯物論の理念たる「あらゆる個人の幸福」(GS4, 221)の前に立ちふさがる障

害を除去するためだけにあるのではない。むしろこの態度は、人々を抑圧する社会それ自体から必然的に生じるものであることが強調される。しかし、だからといって、この批判的態度は抑圧的な社会構造の持続に与することはない。そうではなく、社会の中から社会それ自体の矛盾を暴き出しうる態度が必然的に現れるという事実でもって、この態度は社会構造に存する矛盾をその内部から告発する。そして、この世界が人々による労働の産物である限り、批判的態度の下でなされる認識は、現在の経済様式に根を持つ主体に即したものでなければならない (cf. GS4, 181)。

つまり、ホルクハイマーにおける批判的理論というのは、社会構造それ自体の矛盾を内在的に告発するような主体の認識に導かれた理論ということになる。この理論は、必ずしも現在の窮乏を除去する具体的なイメージを持っているわけではない。しかし、少なくともこの理論は、現在の社会が密かに抱いているイデオロギーを告発する。ホルクハイマーが「この理論は、現実の隠された秘密を口に出して言うだけである」(GS4, 191)と述べているとき、これは彼の理論におけるイデオロギー批判のポテンシャルを的確に表現している。

加えて、ホルクハイマーによれば、批判的理論が考察対象としているのは、「分業」概念である(cf. GS4, 171)。たしかに 30 年代ホルクハイマーの思想形成の多くを負っているマルクス哲学において、この概念は必ずしも否定的評価が下されるものではなかった。しかし、殊に学問における分業では事情が異なるとホルクハイマーは見る。かつてホルクハイマーが「所長就任講演」の中で分業的役割を課した専門諸科学は、自らの理念たる科学の普遍的体系を目指して、いくつもの経験則から仮説を立て、それを事実へと近づけることで理論を形成していく(cf. GS4, 166)。そのため、科学者の仕事というのは、いくつもの経験則と所与の事実から一般的な理論を定式化することである。しかし、こうして生み出された理論は、その中で扱われている対象から歴史性を排しているし、その理論が実際に適用される主体にしても、現在の経済様式から完全に切り離されているという仮定の下で扱われることになる。ホルクハイマーは、実際に歴史に影響を及ぼす主体と、その主体を一定の科学的カテゴリーに適用する科学者たちが認識する主体との間にズレが生じることを指摘するのだが、彼はこれを分業による弊害と見ている (cf. GS4, 196)。

つまり、批判的理論の具体的な課題の一つは、専門諸科学が扱う主体と歴史的な主体との内容的なズレをいかにして修正していくのか、ということである。この問題を解決する糸口が見つからない限り、専門諸科学による学問経営を推進しても社会は正しく叙述されえず、事実だけに即した社会分析を行ったところで、主体による社会の変革可能性が見えてくることなどない。そこでホルクハイマーは、学問経営に代わる哲学的方法論として「弁証法」にその可能性を見る。

実際、ホルクハイマー自身が論考「伝統的理論と批判的理論」に付された「補遺(Nachtrag, 1937)」で「〔……〕批判的理論は弁証法的な機能をもつ」(GS4, 224)と述べているように、彼は自らの理論と弁証法の親和性を強調している。しかし、批判的理論において用いられる方法論が弁証法といかなる関係性を持っているのかについては論考「伝統的理論と批判的理論」およびその「補遺」では詳細に述べられていない。ただし、論考「真理の問題によせて」(Zum Problem der Wahrheit, 1935)では、批判的理論における弁証法の役割を見て取ることができる。というのも、この論考でホルクハイマーは、理論一般と歴史との関

係を探るために、「非完結的な〔unabgeschlossen〕唯物論的弁証法」(GS3, 317)という方法論を自身の思考枠組みとして提示しているからである。彼の理論における弁証法の役割を解明するために、以下の段落ではその具体的な方法を示す。

まず、このホルクハイマーにおける弁証法は、自身を完結したものであるとみなすことはない。すなわち、伝統的な形而上学や実証主義が用いるそれとは異なり、この弁証法は、社会のそのつどの時代状況に左右され、その中で生じる具体的な出来事に依存しながら、対象に作用する。そして、この弁証法を作用させるには、「一定の知識がどのような意味だったり価値だったりをもっているのかは、一般的かつア・プリオリには言うことができない」という前提が必要である (cf. GS3, 294-296)。ホルクハイマーは、この前提の下で伝統的理論と対峙する。彼にとって真理というものが存在するのならば、それは一般化されたものとしてではなく、常に未完結のものとして現れる。ただしホルクハイマーは、この真理が未完結であるからといって、それが偽であると断定することはない。むしろ我々は、真理を探求する理論の内実を背後から規定してきた利害関心の存在を認めつつ、そのつど真理とされるものの中に現れる誤りを、批判的に訂正していかねばならない。そのため、真理と理論相互の不断の関わりが、ひとつの正しい実践の契機となる(cf. GS3, 304-305)。すなわち非完結的な歴史の中で、相互に矛盾する形で現れる理論と実践を恒常的に止揚させる努力こそ、伝統的理論が描き出す現実に対する唯一の抵抗手段でありうる。

しかし、批判的理論はこうした抵抗の契機を提示するだけではない。この理論に導かれた理性は、将来の社会に対して「実存論的判断(Existenzialurteilen)」[17]を下す。彼は論考「伝統的理論と批判的理論」の中でこの判断について、以下のように述べている。

> 〔……〕批判的な社会理論は、全体として、唯一の実存論的判断を展開したものである。その判断の内容は、おおよそ次のようなものである。すなわち、近代史の基盤となるような歴史的に与えられた商品経済の基本形式は、時代の内的外的対立をはらみ、その対立をより先鋭化した形で絶えず生み出し、人間の力が発展し個人が解放されるという上昇期を経たあと、〔そして〕人間の自然支配の力が途方もなく進展したあと、最終的にはそれ以上の発展を妨げ、人間をとある野蛮に駆り立てる、というものである。(GS4, 201)

批判的理論は、現行の社会構造から生み出されるものであるのと同時に、その中で行われる自然支配としての労働によって、いずれ人間は野蛮状態に陥ることになるという判断を下す。そして、主体はこの判断を通じて、社会に内在する矛盾の現れそのものとして姿を見せ、現実を不当なものであると告発するのである。

さらにホルクハイマーは、カントの判断形式を念頭に置いた、定言的判断(kategorisches Urteil)と仮言的判断(hypothetisches Urteil)に実存論的判断を対置させ、同論考の注で次のように述べている。

> 定言的判断は、市民社会以前の社会に典型的である。事情はそういうわけなのだから、人間はそれを何も変えることはできない。選言的判断形式のように仮言的判断形式は、

> とりわけ市民的世界に属している。ある種の状況のもとではこの効果が現れる。事情はこうであるか、あるいは違っているかのいずれかである。批判的理論は次のように説明する。事情はそうである必要はない、人間は存在〔Sein〕を変えることができるし、そのための状況はいま存在するのである、と。(GS4, 201)

現実の社会構造を「超越して」定式化された判断形式は、それが定言的もしくは仮言的かは関係なく、この社会は変えられないという結論しか導くことができない。というのも、結局のところ、これら判断は共通して、前市民的もしくは市民的な世界観の下で生み出されたイデオロギーの保存に与するだけであり、しかもそのことに対して無自覚であり、それどころか自身が歴史を超越して作用していると考えている点で、主体による社会変革には何ら寄与し得ないからである。しかし実存論的判断は、矛盾する社会から生み出された批判的理論を通じて、主体はこの社会の中にある存在を変えることができるとみなす。ただし、この判断がカント的な判断と著しく異なる点は、現状を変えられる状況は過去にも未来にも、さらには超時間的な場にもなく、「いま(jetzt)」存在すると考えている点である。

こうした判断を下す態度こそ、批判的理論が批判的たるゆえんである。特定の時代・人間・社会に対してしか効力を発揮しないこの理論にとって、来たるべき未来や過ぎ去りし過去に変革の可能性を見て、その期が訪れるまで待ち続ける静態的な態度は破棄されねばならない。現在の社会構造を超克した先で幸福を実現するためには、常に主体による変革可能性を模索する、批判的かつ理論的な努力が必要である。

たしかにホルクハイマーによる学際的唯物論プロジェクトは、デミロヴィッチが指摘するように、37 年の時点では挫折していると見てよいだろう(cf. Demirović 2019, 189)。しかしホルクハイマーは、全ての人間の幸福を実現するためには、あくまで哲学と専門諸科学の協働が必要であると考えている。論考「伝統的理論と批判的理論」で批判されているのは、対象を非歴史的に扱う諸科学の態度それ自体であって、決して諸科学の理論的成果が否定されているのではない(cf. GS4, 207)。常に人間の心的領域と歴史の間で生じるダイナミズムを認識しつつ、完結することのない弁証法的思考の下で主体による実践の契機を模索し、実存論的判断をそのつど下す理論、これこそ伝統的理論に抗しうる 30 年代ホルクハイマーの批判的理論である。しかし、伝統的理論の問題点を指摘しさえすれば諸科学との協働は可能だと考えていた 30 年代ホルクハイマーは、いささか楽観的であった。次節では、その理由を 40 年代初頭の諸論考から見ていく。

IV　1940 年代①：過渡期の哲学

ここまで 30 年代ホルクハイマーによるいくつかの論考を参照することで、彼の哲学における批判の役割を解明してきた。以下の節(第 IV 節・第 V 節)では、彼の方法論としての批判のどの部分が 40 年代へと受け継がれ、また変化してきたのかを 40 年代前半のいくつかの論考および『啓蒙の弁証法』そして『理性の腐蝕』の解釈から明らかにしていく。

4.1 哲学の社会的機能

37 年の論考以来､引き続き 41 年まで精力的に論考を執筆し続けていたホルクハイマーであったが、ナチス・ドイツのユダヤ人迫害による自身のアメリカへの亡命、そこで体験した資本主義の過剰、盟友 W・ベンヤミンの自死などといった度重なる戦争体験から、論考の内容も次第に社会に対するペシミスティックな見方が強くなる。こうした状況の中で執筆された二本の論考「哲学の社会的機能」(Die gesellschaftliche Funktion der Philosophie, 1940)と「理性と自己保存」(Vernunft und Selbsterhaltung, 1941/1942)では、それぞれ、社会に対する「哲学」の位置づけ、そして人々を野蛮へと駆り立てる「理性」への反省が述べられる。

論考「哲学の社会的機能」では、これまでと同様に形而上学と実証主義を念頭に置きつつ、彼らが定める「哲学」の定義について議論される。それによれば、形而上学者たちにとって哲学というのは、存在や神といった最高原理についての認識を扱う独立科学である。他方で、実証主義者たちにとって哲学というのは、人間の知識体系全体を形成する学問であり、科学の副産物ないし補助科学である。そして、それぞれ定義のベクトルが異なる両者は、他方を完全に否定するまで戦いを続ける(cf. GS4, 332-334)。しかし、こうした闘争にもかかわらず、彼らはじつのところ「哲学は概念を扱うものだ」と考えている点では違いはない。加えて、彼らは増大する科学への社会的需要に自らを積極的に従属させる点でも共通している。科学技術の進展に伴い、生活世界は物質的に豊かになる一方で、こうした豊かさの向上には何ら寄与しえないとされる哲学の社会的需要はますます低下する。やがて彼らの言うところの哲学は、自らに社会的価値を付与すべく、社会の知的進歩の下で科学に対し積極的に概念を提供するだけの機械となる。しかし、こうした現状に対してホルクハイマーは、あくまで哲学には科学一般とは異なる社会的機能があると考える。彼は次のように述べる。

> 〔……〕哲学の社会的機能は、〔……〕批判的、弁証法的思考の中にこそ、発見されるべきであるという点を我々は今一度強調しておきたい。哲学は、世界の中に理性を生じさせるための不屈で方法論的な企てである。(GS4, 347)

批判的な哲学は、自己完結した体系の中に閉じこもるものではない。むしろこの哲学は、現在の社会の中で主体による批判的、弁証法的思考を促す。その意義は、こうした思考を通じて世界の中に理性を生み出すことによる「理性的社会」の実現である。そのためホルクハイマーは、「理性と現実の宥和(Versöhnung)はすでに達成されている」という態度、そして「現在の社会の中で人間の自律はすでに確保されている」という態度を積極的に表明する同時代の哲学ないし科学一般に対して懐疑的になる(cf. GS4, 340)。批判的理論としての哲学は、そうした科学的態度を弁証法的思考によって告発すること自体に意義がある。

4.2 理性の可能性

しかし、理性的社会を実現させようとするホルクハイマーの試みは、これまで伝統的理論を基礎づけてきた理性概念そのものをめぐって、ある困難に直面することになる。論考

「理性と自己保存」で述べられる内容がそれだ。

この論考でホルクハイマーは、「理性」を巡る哲学諸派の論争に着目する(GS4, 320-321)。そこで明らかとなるのは、「理性の概念は、はじめから同時に、批判概念を自身のうちに包摂している」(GS4, 321)ということである。しかし、今日の理性概念は自らに批判概念を見出すことができていない。というのも、現在の社会において理性は「ラディカルに道具的な意味に回帰している」(GS4, 322)からである。このことについて、ホルクハイマーは、以下のように詳述している。

> 理性にかんするそれら規定をひとまとめにして言うのなら、それは、目的〔Zweck〕に沿って手段〔Mittel〕を最もよく按配すること、あるいは思考を労働力の省力化的な機能として取り扱うことである。こうして理性は一つの道具となり、利益に最も敏感で、徳として冷静さと節度をもったものとなる。(GS4, 323)

ここで問題なのは、理性が労働力を省力化する「だけ」の道具になっている点である。つまりこの理性は、不幸や抑圧を再生産する市民的な技術的進歩を促すためだけに機能している。また、目的に従属するだけの理性は「特殊性」や「普遍性」といった、概念的思考を括弧に入れる。そしてこの理性によって、歴史的主体に備わるいくつもの個別的利害関心は、人間を自己保存という目的に従事させるための一要素にまで貶められ、やがてひとつの「カオス」という単に非歴史的かつ自己完結した記号の中に押し込められる。ここにホルクハイマーは理性の危機を見ている(cf. GS4, 327)。そして、記号の中で単純化された個人は、理性的社会という理念を能動的に持つことなど許されず、ただ現状に適合するだけの非歴史的な個人となる。「変革を目指す思想は、全面的破局という意識へと飲み込まれてしまったのだ」(GS4, 345)と述べられているように、不幸についての意識は弁証法的に止揚されることもなく、個人は理性とともに破局への一途をたどることになる。

シュヴェッペンホイザーが指摘するように、この時点でホルクハイマーは、「理性的社会」という理念において要請されていた理性そのものが、単に手段と目的を合理的に調整する道具的機能に収縮し、社会のイデオロギーを投影するだけの機能に制限されていることに自覚的である (cf. Schweppenhäuser 2023, 97-98; 113)。そして、このことは、批判的理論が依拠してきたマルクス哲学に対しても懐疑の目を向けることを意味していた。

ただしここで注意せねばならないのは、ホルクハイマーは理性に対する信頼を完全に放棄したわけではなかったという点である [18)]。彼にとって問題だったのは、主観が客観との関わりを絶ち、自己完結的に対象を認識・支配する「主観の優位」という事態であった。「本来、理性は〔……〕主観的能力を持っている。ところで、こうした理性の主観的能力の中にあるものは、理性の自己自身の存在への関わりによってだけではなく、生きとし生けるものへの客観的な関わりによって止揚される」(GS4, 349)と述べられているように、ホルクハイマーにとって主観は自己完結したものではありえず、あくまで客観との関わりの中で止揚されねばならないものであった。また、彼にとって理性というのは、客観があってこそ主観が成立するという「客観の優位」を認識するための機能である。そして、このことを認識するための具体的な方法こそ、理性による弁証法である。ただし、彼の理性に対す

るこうした信頼は、「批判的」態度が必然的に引き出され、主体に現状への批判を可能にするような社会構造が現実にあるのならば、全面的破局へと向かいつつある理性によって実存論的判断はなおもなされうるという考えに基づいたものである。この時点でホルクハイマーは、「客観の優位」という事実が結果的に主観(主体)を変革し、理性が客観的世界としての不当な現実を告発しうることを信じていた。

このように、40 年代初頭のホルクハイマー哲学は、37 年の論考で明らかとなった批判的理論を軸に、理性的社会の実現をめぐる問いから、理性と社会の緊張関係をめぐる問いへと自らの思考の重心を移動させている。そのため、37 年の論考で示唆された諸科学との協働という理念は後景に退くことになる。

V　1940 年代②：理性批判

5.1 哲学の危機

ここまで見てきたように、37 年から 40 年代初頭までのホルクハイマーは、形而上学と実証主義の体系に特徴的な「非歴史性」を誤りとして告発し、それさえ乗り越えることができれば、諸科学は理性的社会を実現するための正しい理論として機能しうると見ていた。というのも、伝統的理論に存する欺瞞は、その理論が歴史的な形態を持ち、同時に社会諸関係に組み込まれていることをその内部から告発することで解消されうるとホルクハイマーは考えていたからである。この点で彼はたしかに楽観的であった。

しかし、『啓蒙の弁証法』執筆時のホルクハイマーは、アドルノとともに、理論一般を構成する理性概念そのものに批判の矛先を向けることになる。というのも、彼らは批判対象である社会を現行の社会たらしめた市民的=啓蒙的な思想そのものにこそ、人間の野蛮化という退行への契機があると考えるようになったからである。つまり、非完結的な唯物論的弁証法によって伝統的理論を超克しようとする実証主義と形而上学への同時批判だけでは、理性的社会の実現には至らない。むしろホルクハイマーは、伝統的理論を形成してきた思考そのもの、さらに言えば伝統的な思考様式を背後で支配してきた理性そのものへのラディカルな批判が必要であると考えるようになる。

そのため、30 年代から 40 年代初頭にかけて取り組んできたホルクハイマーの試みは暗礁に乗り上げることになった。『啓蒙の弁証法』では次のように述べられる。

> 我々の仕事は、少なくともテーマの上では、伝統的諸学科、つまり社会学、心理学、認識論を拠り所とするはずであった。しかし、ここにこうした形でまとめられた諸断片は、我々がそういう信頼を捨てねばならなかったことを示している。(GS5, 16)

ハーバーマスによれば、この記述をもってホルクハイマーにおける学際的唯物論の構想は、完全に断念された(cf. Habermas 1985a, 516-518)。事実、学際的唯物論を遂行するための学問経営が主体の歴史性を無視してなされているという論点は、すでに 37 年の時点でホルクハイマー自身によって指摘されており、この難点を引き起こす理性への批判も、すでに 40 年代初頭の諸論考で扱われていた。しかし、それでもホルクハイマーは、理性による「客

観の優位」は常に成立しうるのだと信じていた。だが、『啓蒙の弁証法』でのホルクハイマーとアドルノは、理論一般を支えてきた理性への信頼を放棄し、理性的社会の実現を強調するだけでは、人間が「一種の野蛮状態へと落ち込んでいく」(GS5, 16)ことは止められないという諦めを表明することになる。とりわけホルクハイマーは、こうした状態を招いた原因が理性の全般的な腐蝕にあると見ていたため、『理性の腐蝕』で彼は現行の理性を「道具的理性」と名指したうえで、それを批判することになるのである[19]。

しかし、ホルクハイマーとアドルノは、必ずしも理性批判を理性だけに依拠して行おうとしたわけではなかった。むしろ彼らは、理性の腐蝕に対し、言語および言語に存する弁証法的機能によってそれを克服しようとしている。以下では、40 年代中盤で批判される理性の内実を明らかにした後、彼らの理性批判は理性によって直接なされているのではなく、言語を通じて間接的になされていることを示す。

5.2 道具的理性

理性批判について具体的に検討する前に、以下ではホルクハイマーが批判の対象にする理性概念について、彼自身が比較的平易な言葉で語っている『理性の腐蝕』での議論から確認していく。本書でホルクハイマーは、論考「理性と自己保存」で語られた理性概念をより明確に図式化する。

まず、ホルクハイマーは理性概念を二つに分割する。すなわち、「主観的理性(subjektive Vernunft)」と「客観的理性(objektive Vernunft)」である[20]。彼は、この二つの理性をそれぞれ分析することによって、人々が一般に「理性」と聞いて想定する機能を明らかにする。

主観的理性は、(分類・推理・演繹する能力という)「思惟装置の抽象化機能」(GS6, 27)を用いることで、任意の目的に至るまでのプロセスが妥当であるか否かにのみ関心を寄せる。つまり、この理性は、所与の目的に対する手段の整合性に強い関心を寄せる。ただし主観的理性は、「主観的意味において合理的〔vernünftig〕」(GS6, 27)であるような目的、すなわち自己保存に関わる目的にだけは関心をもつ。つまりこの理性は、自身にとって利益があるような目的には関わるが、そうした利益を度外視した、対象の客観的な意味の探求といった思弁的な目的には関心を示すことはない。またこの理性は、複雑化した社会構造の中で自己保存を行うべく、利害関心という尺度に従って手段の行使に関する単純な判断のみを下す。やがて主観的理性は、自身の判断を正当化するための基礎概念の客観性を非合理的であるとして排除することで、形式的なものとなる。

主観的理性が目的よりもそれへと至るための手段を重要視するのに対し、他方で、客観的理性は手段より目的の内実を重視する(cf. GS6, 28)。主観的理性は主体の行為を主観的な利害関心でしか規定し得ないのだが、客観的理性は前述の主観的理性の機能を認めたうえで、恣意的に設定した絶対者や神といった包括的体系それ自体と存在者を調和させようとする。こうした努力の最たる例である形而上学は、絶対者や神の存在を前提に、我々の眼前に広がる客観的世界にも彼らの理性が実現されているとみなす。そして客観的理性は、自身が考える自己完結した世界をエゴイスティックな人間と宥和させようと努力を重ねるのである(cf. ibid.)。客観的理性の要点は、主観的理性とは対照的に、手段としての行為と目的とを完全に一致させることにはない。むしろこの理性は、手段と目的の不和の中で善

や真理がいかにしてその究極目的である「自己実現」を果たしていくのか、ということにしか関心がない(cf. ibid.)。

ここまでの議論からわかることは、主観的理性が自己保存という目的を正当化するための基礎概念の客観性を否定することが、同時に客観的理性を基礎づける善や真理といった客観的概念を追放することをも意味しているということである。そのため、主観的理性と客観的理性は両立しえない。それどころか、主観的理性は対象に判断を下すさいに依拠している神話的(非合理的)なものを攻撃することで、自身から倫理的道徳的宗教的に洞察する媒体としての自己を抹消してしまう。このことは、自身が神話的なものに依拠しながら客観的理性の存在を否定するという自己矛盾に陥っていることを示している (cf. GS6, 39-40)。ホルクハイマーは、ここに理性の問題点があると考える。

主観的理性という思惟装置の抽象化機能によって、思考は主体の行為と現実が一致するよう要求し、それに反対しようとするものは全て思弁的だとして否定される。客観的理性が主観的理性に糾弾されることで、この 2 つの理性は人々の利害関心に従って作用するだけの道具となる。加えて、対象の合理性を判断する道具でしかない主観的理性は、一種の物質性や盲目性を帯び、やがて物神化され、偶像となる(cf. GS6, 44)。これはまさに主観的理性が思弁的であると排除してきた非合理性の実体化にほかならない。

こうして、客観的理性を排除した形式的=主観的理性、つまり「道具的理性(instrumentelle Vernunft)」は、自身の合理的根拠を喪失し、最終的に自らが崇拝の対象になる。すなわちこの理性は、合理性といった客観的概念の探求など非合理的であると退けつつ、自身が偶像という非合理的かつ形而上学的な実体と化す矛盾に陥ることになる。

5.3 「ここといま」の哲学

道具的理性を前にして、ホルクハイマーはかつてのように理性的社会への希望を表明することはない。というのも、道具的理性に収縮してしまった理性は、現実の支配形態を認識し批判する以前に、もはやそれ自身が批判の対象となり、批判的理論の理念たる理性的社会も、30 年代に構想したようなあり方では限界が見えたからだ。しかし『啓蒙の弁証法』でホルクハイマーは、アドルノとともに道具的理性の中から弁証法的思考を救出しようとする。ただし、ホルクハイマーらは 30 年代の非完結的な唯物論的弁証法に固執することはせず、弁証法的思考において現れる概念の性質に着目する。

> 概念というものは、その言葉の下に把握されたものの微表の統一として規定されるのが常であるが、むしろその始原から弁証法的思考の産物であった。つまり弁証法的思考においては、どんなものもいつもただ、それだけではないものになることによって、それであるところのものとなるのである。(GS5, 38)

一般に概念というものが考えられるとき、必ずそこにはその概念を否定する要素が前提されている。例えば「正義」という概念は、現実を支配している「不正義」とも呼べる状況があってはじめて考えられる。つまり、人々が「理性」という概念を口にするとき、その概念には「非理性」の存在が前提されねばならない。「偽」なる状況が存在してはじめて我々

は「真」なる状況を語りうるのである。道具的理性の欺瞞は、概念一般に存するこの否定的要素、すなわち反定立的(antithetisch)要素の存在を非合理的であるとして退ける態度にほかならない。

道具的理性に抵抗するべく彼らは、概念一般を語る「言語」の役割に着目する。ただしここで言われる言語は、実証主義が用いるそれとは全く異なるものであると強調される。

> むしろ弁証法は、どのような図像〔Bild〕をもテキストとして開示する。弁証法はこの図像の様々な相貌から、その図像の虚偽性の告白〔……〕を読み取ることを教える。それによって言語は、単なる記号体系以上のものになる。(GS5, 46-47)

我々は、対象を認識しても、その認識から得られた図像をありのままのテキストとして他者に語ることはできない。この図像は我々に解釈(Deutung)を要求する。この解釈というのは、対象自らが自身の否定的要素を告白していることを我々が読み取る作業にほかならない [21)]。すなわち、我々の前に現れる対象の背後にある否定的要素を読み取ること、これがホルクハイマーとアドルノの述べる弁証法の機能である。彼らの述べる「言語」というのは、こうした解釈的作業によってでしか対象が表象されえないような、弁証法的な言語である。そのためこの言語は、実証主義が用いるような数学的言語以上のものとなる。また『理性の腐蝕』においてホルクハイマーは、哲学というのは、このような言語を媒介に「名と事物の一致(die Übereinstimmung von Name und Ding)」を目指すものであると述べる(cf. GS6, 179)。『啓蒙の弁証法』では、神話の時代に語られた「マナ(Mana)」に着目することで、この言語の機能をさらに明確にしている。

かつて我々は語り得ぬものを語る術を身に着けていた。例えば神話の時代、我々が未曾有の大災害を経験したとしよう。このとき我々は日常生活を営む中では決して経験し得ない体験をする。やがて、大災害の中で経験した恐るべき出来事はそれぞれ「神々の怒り」であったり、「雷」や「地震」であったりと名付けられることになる。マナというのは、我々が超経験的なものを経験したときに生じる。そして、それを経験することで発される驚きの叫びが名となる(cf. GS5, 37)。一度きりの経験に宿るマナは、当然ながら一度しか我々の前に現れることはない。もし次に同じような災害を経験したとしても、そこでの経験は、すでに「雷」や「地震」といった名の中に保存されている。ホルクハイマーとアドルノは、かつてマナとして現れていた「差し替えようとしても差し替えの効かない」一回性を「ここといまの神聖さ〔die Heiligkeit des hic et nunc〕」(GS5, 32)と呼ぶ。

この点に関して J・ロバーツは、この神聖さは疎外とは対極の位置にあると指摘する(cf. Roberts 2004, 60-61)。主体は目的としての自己保存を遂行するべく、自己の外部としての外的自然を支配する。しかし、この自然支配はやがて主体自身に備わる精神を禁欲的に規律化し、自己精神としての内的自然をも支配せねばならなくなる。つまり、支配は支配のために内面化される(cf. GS6, 106)。そして、この支配の内面化によって、主体は目的の世界を離れ、手段の世界に機械的に従属することを強制される (cf. GS6, 113)。ロバーツは、自然支配という目的に従事する主体の態度がどこまでも未来志向的であり、その結果として主体は、「ここといま」としての現在を過去の連続であることを忘却していると指摘する。

こうした主体の疎外的状況によって我々は、(「私」を含めた)事物が「いま」そして「ここ」に存在していることを身体的に感じ取る能力を喪失してしまう。つまり道具的理性によって疎外された主体は、過去から未来までの連続を繋ぐ現在を喪失し、不幸と自己破壊を再生産することになる。そのため、我々は疎外と対極にある「ここといまの神聖さ」を通じて「いま」そして「ここ」にある存在を請け戻さねばならない(cf. Roberts 2004, 60-61)。

この点に関してホルクハイマーは、「私」としての精神が「ここといま」を喪失している状態、つまり疎外をめぐる精神と自然の関係性は、(伝統的理論に特徴的な)二元論的思考とは異なる形で反省の光に照らされねばならないと述べる(cf. GS6, 174)。批判的理論としての哲学において重要なのは、精神と自然を互いに反目させることではなく、両者を相互に批判した先にある宥和である[22]。ただし、その意義は両者を単に結びつけることではない。むしろ、両者それぞれに備わる矛盾の契機を把握し、「ここといま」の連続上に存在する、疎外された主体と支配された自然の窮状を映し出すことに宥和の意義がある。そしてこの宥和を表現するものこそ、「言語という普遍的媒介物」(GS6, 179)である。神話の時代においてこの宥和は、マナが宿る事物に名を与えることで実現されていた。しかし、我々から「ここといま」を感じ取る能力を奪い取る道具的理性の下で用いられる現在の言語では、事物に適切な名を与えることはできない。それに対してホルクハイマーは、疎外された主体や自然の現実を一つの図像として解釈し、それら図像を構成する概念の否定的要素を明るみに出す言語、すなわち弁証法的な言語を構想した。この言語によって、現実の窮状を覆い隠す虚偽性は暴露され、主体や自然は適切な名を与えられると同時に、正しく認識・洞察されうる。その結果、それらは再び適切な名とともに「ここといまの神聖さ」を獲得することができる。

ホルクハイマーは、言語を媒介に名と事物を一致させることで、主体と自然の疎外的状況を克服しようと試みた。こうした言語との関わりを通じて、彼は哲学がなすべきことを次のように規定する。すなわち、哲学というのは「我々の認識と洞察のすべてを編み上げ、諸々の物が正しい名を与えられる言語的構造〔eine sprachliche Struktur〕を作り出そうとする意識的な努力」(GS6, 179)をなさねばならない。ホルクハイマーによれば、かつての社会は、事物を名と一致させることができていた代わりに、個人や集団間で共有可能な文化的技術的成果を十分に持ちえなかった。しかし、現在はかつて以上にそれら成果を共有するための物質的条件は整っている。問題なのは、物質の普及と同時に主体が抑圧されていることを我々が認識していない状態である(cf. GS6, 165)。この状態では、まだ主体は存在を変えることができない。つまり、実存論的判断を下すことはできない。それでも我々は、事物が正しい名を与えられる言語的構造を作り出す努力をしなければならない。すなわち、40 年代ホルクハイマーにとって哲学というのは、疎外を生み出す不当な現実を解釈し、そこに現れる事物を適切に名と一致させる弁証法的思考によって、対象に「ここといまの神聖さ」を復活させる言語的構造を作り出すことである。

たしかにホルクハイマーとアドルノにとって、理性的社会を実現するための理性など陳腐なものにすぎない(cf. GS5, 62)。しかし同時に、「ここ」と「いま」に存在せねばならない精神と自然の宥和を達成するための言語的構造を作り出す態度は保持せねばならない。こうした態度こそ、40 年代ホルクハイマーによる批判的態度である。先述したように、道

具的理性の下で腐蝕してしまった既存の言語は、社会のイデオロギーを内に保持するだけの道具である。それに対してホルクハイマーが強調する言語は、現実の解釈を通じて概念に含まれる否定的・反定立的要素を明るみに出すことで、既存のイデオロギーを内在的に批判するのである。

最後に、ホルクハイマーがこのような言語の可能性を提示していることを示したうえで強調せねばならないのは、彼は必ずしも道具的理性を理性によって克服しようとしていたわけではないということである。彼は、現実を正しく語り得ない言語に道具的理性の影を見たことで、理性への直接的な批判に代わって、既存の言語を批判することを通じて道具的理性を克服しようとしている。そのため、ハーバーマスが『啓蒙の弁証法』における理性批判を遂行的矛盾と指摘するとき、彼はホルクハイマーが言語そのものに弁証法のポテンシャルを積極的に見出し、その言語を従来の実証主義的言語と区別していることを考慮していなかった。また、ここまで見てきたように、ホルクハイマーが理性批判の可能性を理性ではなく言語によって行おうとしていた数々の記述からも、必ずしも彼の思想がこの遂行的矛盾に対して無意識だったわけではないことをうかがい知ることができるだろう。

VI おわりに

本稿は、実証主義と形而上学への同時批判を遂行する 30 年代の諸論考から出発し、40 年代の理性批判をめぐる諸論考の議論を追うことで、ホルクハイマー哲学において一貫して維持されていた思考モチーフと、その途中で彼自身の思想に生じた変化を検討してきた。以下では、先行研究の是非を改めて検討する中で、彼の哲学における「変化」と「連続」を腑分けしていくこととする。

まずは、ホルクハイマー哲学を一貫して規定している思考の軸と、それをめぐって生じた変化の側面を確認する。30 年代の批判的理論は、対象を非歴史的なものとしてでしか扱わない学問経営を直接的に批判している。そのため、とりわけ批判の対象になるのは、学問経営の主導的役割を果たしてきた伝統的理論である。しかし 40 年代ホルクハイマーは、伝統的理論を根底から支えてきた理性概念そのものに、主体を疎外する影を見たため、それを道具的理性と規定し、批判している。なるほど、表面的に見れば、彼の思想はラディカルに変化しているように見えるだろう。ただし、歴史的な主体の保存という彼の思考の軸が維持されている点は考慮されねばならない。詳述するならば、一方で 30 年代ホルクハイマーによる伝統的理論への批判は、その理論において現れている主体が非歴史的なものとして扱われていることを指摘し、それに代わる批判的理論を定式化することで、歴史的な主体を理論の内部に保存しようとしている。ホルクハイマーは、この目標が学際的唯物論では達成されないと悟ったため、37 年には学問的分業としての学問経営を批判することになるのである。他方で 40 年代ホルクハイマーによる理性批判は、主体を非歴史的な存在に退行させる理性を直接的に批判するのではなく、既存の実証主義的な言語において扱われる主体の非歴史性を批判し、それに代わる弁証法的な言語を構想することで、30 年代と同様に、歴史的な主体をこの言語の内部に保存することを目的としている。つまり、歴史的な主体をいかにして自らの理論の内部に保存すべきか、という問いへの解答の試みがホ

ルクハイマーの思想の軸として維持されているという観点から見れば、彼の思想の変化は、その批判対象でしかないことが理解できるだろう。

次に、ホルクハイマー哲学において維持されている側面を確認する。第一に、彼の哲学はマルクス的な「分業」概念との対決に貫かれていることである。「所長就任講演」でのホルクハイマーは、マルクスが肯定的に捉えていた「分業」概念を引き継ぐ形で、それを学問経営として学問領域にまで拡大しようと画策していた。しかし、彼は 37 年になると、分業の問題点を学問経営における主体の消滅から見出し、それを批判的理論によって超克しようとする。そして 40 年代になると、それでも人間の野蛮への後退が止まらない現状を前にし、ホルクハイマーは分業それ自体に理性の道具化の影、そしてロバーツが指摘するように、労働疎外の影を見ることになり、批判の対象にする。デミロヴィッチは、こうした 30 年代から 40 年代にかけてのホルクハイマーの思考プロセスを一種の変化と見ているが、むしろこうした思考プロセスは、マルクス的な「分業」概念との一貫した対決、すなわち連続と見るべきだろう。

第二に、ホルクハイマーは、伝統的理論であれ、道具的理性であれ、対象を批判するための方法論としての弁証法を一貫して用いている。つまり、30 年代では理論の非歴史性を告発するために、40 年代では言語を通じて概念に存する反定立的要素を表現するために、弁証法は一貫して不可欠の機能として扱われている。ただし、彼が用いる弁証法は、常に社会に存する矛盾や対立に向けられていることは考慮せねばならない。伝統的理論と道具的理性に共通する欺瞞は、歴史的な主体が必然的に抱く矛盾を概念把握しようとせず、排除する点にある。ホルクハイマーの問題意識は、理論および理性が扱う主体と実際の社会に存する主体の内容的なズレを修正することにある。そのためにホルクハイマーは、シュヴェッペンホイザーが指摘するように、既存の学問において把握されてきた現実の諸矛盾を(弁証法的な)概念によって再構成しようとしているのである。

ここまで 30 年代から 40 年代までのホルクハイマー哲学を、その「変化」と「連続」から概観することで、次のような問いが生じる。すなわち、「理性」と「現実」、もしくは「主体」と「自然」を宥和させる媒介物としての言語は、具体的にどのような言明を通じて、不当な現実を批判しうるのか、という問いである。名と事物を統一的な数学的言語で一致させようとする実証主義に対して、ホルクハイマーは 30 年代から一貫して批判的態度を表明し、40 年代には彼らによる言語を退けるまでに至っている。こうした態度は、『啓蒙の弁証法』以降の彼の哲学にどのような帰結をもたらしたのか [23]。しかし、これら問題について詳細に論ずる作業は別稿に譲ることとし、ホルクハイマーにおける批判的理論の形成と展開を検討してきた本稿は、ここでいったん閉じることにする。

(神戸大学国際文化学研究科博士前期課程)

注

[1] ホルクハイマーの著作からの引用・参照は全集版に依り、略号 GS のあとに巻数・頁数を表記する(文献情報は後述の参照文献に記載している)。アドルノとの共著『啓蒙の弁証法』に関しても同様。(『啓蒙の弁証法』を含めた)ホルクハイマーの著作から引用するにあたっ

ては、参考文献表にある邦訳を参照したが、訳文は文脈に応じて変更を加えている。ただし、紙幅の関係により、引用するさいに既存の邦訳の頁数を併記することはしていない。

2) 本書は『啓蒙の弁証法』が出版されたあと、彼の亡命先であったコロンビア大学での公開講義の内容を一つの著作として纏めたものである。当時は『理性の腐蝕』という題で出版され、のちにA・シュミット訳によるドイツ語で出版されるときに『道具的理性批判』(*Zur Kritik der instrumentellen Vernunft*, 1967)というタイトルに改められた: GS6, 22-23; 434-435.なお、以下の本文および注で『理性の腐蝕』を引用するさい、その頁数は全集に収められている『道具的理性批判』にしたがっている。

3) 「批判理論」に関する人々、いわゆる「フランクフルト学派」の思想的変遷について、当時の歴史的状況も踏まえた上で詳述されている大部の著作については Wiggershaus 1994 がある。とりわけホルクハイマーの思想的変遷を論じた伝記的著作については、Wiggershaus 2014 がある。

4) 1932 年から 1941 年まで『社会研究誌』に論考を掲載していたホルクハイマー、アドルノ、H・マルクーゼおよびE・フロムらは批判理論第一世代とよばれ、その後のフランクフルト社会研究所における理論的研究に寄与したハーバーマス、シュミットらを第二世代、ホネット、R・イェッギらを第三世代と呼ぶのが通例となっている。とりわけ第三世代の思想的動向を追った最新の成果については次を参照: 宮本 2024.

5) ここで挙げる先行研究は紙幅の関係で詳述できないが、本稿の問題意識を先鋭化させるさいにとりわけ参考になったため、合わせて参照されたい: Lohnmann 1993; 森田 2000; 大貫 1989.なお、森田はホルクハイマー哲学の変化の原因が『啓蒙の弁証法』執筆にあったとしており、その根本的原因をフロムの離脱に見ている : 森田 2000, 134.ここで指摘されているように、ホルクハイマーの思想は決して一枚岩ではなく、同時代人の影響を色濃く受けている。本稿は内容の性質上、ホルクハイマー以外の同時代人の影響関係について論じることは難しいため、この点については別稿に譲ることとする。

6) 以下、ホルクハイマー以外の著作からの引用は、人名・出版年・頁数の順番で略記する。

7) 同書でハーバーマスは、晩年のアドルノがこの遂行的矛盾を著作『否定弁証法』で乗り越えようとしていたとして高く評価している: cf. Habermas 1985, 144-145.

8) その他ホルクハイマー哲学の「変化」についての詳細は次を参照されたい: Bonß 1993; Brunkhorst 1993; Habermas 1984; 1986; Honneth 1985; Jay 1973; ジェイ 1993. なお、ホルクハイマー哲学の変化についてジェイとトイニッセンは、彼による「全体性」概念の扱いが 30 年代と 40 年代では著しく異なっていることが原因であると指摘している:ジェイ 1993, 318-329; Theunissen 1969, 13-27.また、ジェイとホネット両者が「変化」に関して共通して指摘しているのは、ホルクハイマーによる「自然」概念の扱いである: Jay 1973, 253-255, 268-269; Honneth 1985, 68-69. 特にこの概念については 40 年代ホルクハイマーの思想を理解するうえで重要な論点である。しかし、本稿は 30 年代ホルクハイマーの思想を中心に扱い、そこから 40 年代に至るまでの思想の連続と変化を探るものであるため、この概念について主題的に扱うことはしない。そのため、ホルクハイマーの「自然」概念を主題的に扱っている邦語文献を挙げることで、ここは満足することとする: 上野 2014.

9) こうした議論にもかかわらず、あくまで 30 年代から 40 年代にかけてのホルクハイマー

哲学の維持された側面をとりわけ強調する研究も存在する。それについては以下を参照：Hartmann 1990; Rasmussen 1999; Ritsert 2019; Wellmer 1973.

10) デミロヴィッチによれば、彼らの 30 年代の立場がとりわけ明確に現れている論考は、『啓蒙の弁証法』における、いわゆる「文化産業」章と「反ユダヤ主義」章である：Demirović 2019, 190.それどころか、この『啓蒙の弁証法』こそ、批判理論の理論的発展における暫定的なクライマックスであり、転回点であるとされる(cf. ibid.)。この興味深い論点についてさらに踏み込んだ議論は Demirović 1999 を参照されたい。

11) "kritische Theorie"という語を「批判理論」と訳すべきか「批判的理論」と訳すべきかといった、訳語の問題は別で考察せねばならない問題である。しかし、本稿ではそれを検討できる紙幅がないため、1937 年の論考にそくして"kritische Theorie"という語を用いるさいは、既存の邦訳に倣って「批判的理論」と訳すこととする。

12) 例えば次の文献を参照されたい: Rasmussen 1999; Ritsert 2019; Schweppenhäuser 2023; Theunissen 1969.

13) 引用文中にある亀甲括弧〔 〕は引用者が適宜文脈に応じて補ったものである。また、引用文中で省略した箇所は〔……〕で表す。以下も同様。

14) 論考「歴史と心理学」(Geschichte und Psychologie, 1932)では、歴史とその展開を概念把握し説明するために「歴史の補助科学〔Hilfswissenschaft〕」(GS3, 57)としてのフロイト心理学を導入することの意義が述べられる。そこで明らかとなるのは、社会と個人の生活の中で生み出される心の諸機能は、そのつどの社会構造全体によって決定されること。そして、各時代における個人や集団の心的諸性格を把握するには、常に心的な次元を考慮して区別されねばならないということである(cf. ibid.)。

15) 論考「唯物論と形而上学」(Materialismus und Metaphysik, 1933)では、生産諸力の発展によって、歴史は過去から現在、そして未来に向かって進展し、同時にこの歴史の動態性に巻き込まれている人間の思考もまた、生産諸力の発展によって変化していくことが述べられる(cf. GS3, 90)。

16) ホルクハイマーは同論考の注で、ここで用いられる「批判的」という語は、カントにおける批判の意味ではなく、マルクスの政治経済学における弁証法的批判の意味で理解されねばならないと述べる: cf. GS4, 228.本稿で扱う「批判的」という語もこの記述に従う。

17) 例外がないわけではないが、基本的に邦訳ないし日本で刊行された研究論考において、"Existenzialurteilen"は「存在判断」となっている。しかし、ホルクハイマーは M・ハイデガー『存在と時間』における「存在」という概念に対して、直接的もしくは間接的な言及をとおして批判的態度を表明している(cf. GS3 48-49) ことを鑑みると、現在の日本で用いられる「存在」という訳語をこの単語に適用してしまうと、この語がハイデガー的「存在」から区別されているという解釈が損なわれてしまう。また、英訳でこの語は"Existential Judgment"であり、ドイツ語におけるそれとおおよそ意味は同じと言える。これらを考慮して、本稿では"Existenzialurteilen"の訳語を「実存論的判断」とした。ただし、ホルクハイマーは自身の思想といわゆる実存主義とを区別している点は注意されたい。また、本稿の解釈に対してホルクハイマーによる実存論的判断をハイデガーの決断主義的態度との近さで論じている論考は次を参照：Brunkhorst 1993, 82-86.

[18] ホルクハイマーが理性への信頼をこの時点では完全に放棄していたわけではないという見解については、シュヴェッペンホイザーも同様の指摘をしている: Schweppenhäuser 2023, 123.

[19] この点についてハーバーマスは、道具的理性の存在によって、理性批判は遂行的矛盾に陥ると指摘している(詳細は 2.1 を参照)。だが本稿は、ホルクハイマーおよびアドルノの理性批判が、ハーバーマスの言うところの遂行的矛盾へと完全に陥ってはいないと主張する。この主張についての詳細は 5.3 を参照。

[20] ホルクハイマーは『理性の腐蝕』第二章で、主観的理性を信奉する代表的な思想潮流として論理実証主義を、客観的理性にはネオトミズムを対応させている: GS6, 73-104.なお、ハーバーマスは『理性の腐蝕』におけるこうした同時攻撃を「二正面作戦」と端的に表現している: cf. Habermas 1985a, 501.

[21] アドルノは、哲学の課題を「意図なき現実の解釈」と規定する(cf. Adorno, 1973, 335)。彼によれば、哲学の営みは「現実の中にはなにか意図があるはずだ」という前提から出発すべきではない。むしろ「我々の眼前に広がる現実に意図などない」という前提から出発し、我々のもとに断片として現れる現実を、「判じ絵」(ibid.)を読み解くように解釈せねばならない。しかし、こうしたアドルノ的「解釈」図式とホルクハイマーの言語観にどれほどの親和性があり、両者がそれぞれどの程度『啓蒙の弁証法』に影響を与えたのかについての詳細な検討は別稿に譲らねばならない。

[22] 上野は理性と自然が宥和する可能性、つまり啓蒙についての積極的な概念を与えうるものとして「主体の内にある自然の追想(Eingedenken)」(cf. GS5, 64)を挙げる。この「追想」は、主体に備わっているとされる自律的思惟を解放することを要請する: cf. 上野 2004, 194-195.また、森田はこの「追想」には道具的機能へと収縮してしまった理性による概念的思考の契機が委ねられていると指摘する: cf. 森田 2000, 144; 157; 176.他方でハーバーマスは、この「追想」概念は後期アドルノの著作に見られる一方で、ホルクハイマーが構想した学際的唯物論の目指す理論的認識からは離反しているという見方をしている: cf. Habermas 1985a, 516.

[23] ホルクハイマーが「言語」について立ち入った解釈を行っている論考として、例えば「歴史への信頼」(Vertrauen auf Geschichte, 1946)がある(cf. GS12, 119-127)。シュヴェッペンホイザーによれば、ホルクハイマーにとって問題であった「特殊なもの(das Besondere)」と「有限なもの(das Endliche)」というのは、それらがすでに自然に取り込まれてしまっていることを主体が認識・概念把握しなければ修復不可能である。また、こうした問題を解決するために、この論考でホルクハイマーは従来の実証主義的な言語のそれとは異なる言語構造に着目している: Schweppenhäuser 2023, 99-100.なお、森田も同様の指摘をしている: 森田 2000, 163-165.

参考文献

【一次文献】

Horkheimer, Max (1985-1996): Gesammelte Schriften, Bd. 2-6, Alfred Schmidt u. Gunzelin Schmidt Noerr (hrsg.), Fischer Verlag, Frankfurt am Main.

マックス・ホルクハイマー (1974):『哲学の社会的機能』久野収訳、晶文社〔「哲学の社会的機能」所収〕.
————(1987):『理性の腐蝕』山口祐弘訳、せりか書房.
————(1998):『批判的理論の論理学』角忍・森田数実訳、恒星社厚生閣〔「真理の問題によせて」、「伝統的理論と批判的理論」所収〕.
————(2003):『権威主義的国家』清水多吉編訳、紀伊國屋書店〔「理性と自己保存」所収〕.
ホルクハイマー、アドルノ (2020):『啓蒙の弁証法――哲学的断想』徳永恂訳、岩波書店.

【二次文献】

Adorno, Theodor W. (1973): "Die Aktualität der Philosophie", in: Gesammelte Schriften, Bd. 1, Rolf Tiedemann (hrsg.), Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, S. 325-344.

Bonß, Wolfgang (1993): "The Program of Interdisciplinary Research and the Beginnings of Critical Theory", Kenneth Baynes and John McCole (trans.), in: *On Max Horkheimer: New Perspectives*, Seyla Benhabib, Wolfgang Bonß, and John McCole (ed.), The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, London, pp. 99-125.

Brunkhorst, Hauke (1993): "Dialectical Positivism of Happiness: Max Horkheimer's. Materialist Deconstruction of Philosophy", John McCole (trans.), in: *On Max Horkheimer: New Perspectives*, Seyla Benhabib, Wolfgang Bonß, and John McCole (ed.), The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, London, pp. 67-98.

Demirović, Alex (1999): *Der nonkonformistische Intellektuelle : Die Entwicklung der kritischen Theorie zur Frankfurt Schule*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.
————(2019): "Vernunft und Emanzipation", in: *Hndbuch Kritische Theorie*, Bd.1, Uwe H. Bittlingmayer, Alex Demirović u. Tatjana Freytag (hrsg.), Springer VS, Wiesbaden, S. 187-209.

Habermas, Jürgen (1984): *Philosophisch-politische Profile*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.
————(1985): *Der philosophische Diskurs der Moderne*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.
————(1985a): *Theorie des kommunikativen Handelns*, Bd. 1, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.
————(1986): "Bemerkungen zur Entwicklungsgeschichte des Horkheimerschen Werkes", in: *Max Horkheimer heute: Werk und Wirkung*, Alfred Schmidt u. Norbert Altwicker (hrsg.), Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main, S.163-179.

Hartmann, Frank (1990): *Max Horkheimers materialistischer Skeptizismus: frühe Motive der kritischen Theorie*, Campus Verlag, Frankfurt am Main, New York.

Honneth, Axel (1985): *Kritik der Macht : Reflexionsstufen einer kritischen Gesellschaftstheorie*, Suhrkamp, Frankfurt am main.

Jay, Martin (1973): *The Dialectical Imagination: A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*, Heinemann Educational Books Ltd, London.

ジェイ, マーティン (1993):『マルクス主義と全体性――ルカーチからハーバーマスへの概念の冒険』荒川幾男ほか訳、国文社.

木前利秋 (1994):「批判理論と知の可能性――ホルクハイマーと全体性の放棄」『岩波講座 現代思想 8 批判理論』岩波書店、43-76 頁.

Lohnmann, Georg (1993): "The Failure of Self-Realization: An Interpretation of Horkheimer's Eclipse of Reason", Kenneth Baynes and John McCole (trans.), in: *On Max Horkheimer: New Perspectives*, Seyla Benhabib, Wolfgang Bonß, and John McCole(ed.), The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, London, pp. 387-412.

宮本真也 (2024):「分野別研究動向(批判理論)」『社会学評論』第七五巻、第二号.

森田数実 (2000):『ホルクハイマーの批判的理論』恒星社厚生閣.

大貫敦子 (1989): 批判的理性の可能性への問い――ホルクハイマーとハーバーマス」藤原保信、三島憲一、木前利秋編『ハーバーマスと現代』新評論、69-89 頁.

Rasmussen, David M. (1999): "Critical Theory and History", in: *Handbook of Critical Theory*, David M. Rasmussen (ed.), Blackwell Publishers, Oxford, pp. 11-38.

Ritsert, Jürgen (2019): "Grundbegriff: Kritik", in: *Handbuch Kritische Theorie*, Bd.1, Uwe H. Bittlingmayer, Alex Demirović u. Tatjana Freytag (hrsg.), SpringerVS, Wiesbaden, S. 45-87.

Roberts, Julian (2004): "The dialectic of enlightenment", in: *The Cambridge Companion to Critical Theory*, Fred Rush (ed.), Cambridge University Press, New York, pp. 57-73.

Schweppenhäuser, Gerhard (2023): *Zur Aktualität von Max Horkheimer: Einführung in sein Werk*, Springer VS, Wiesbaden.

Theunissen, Michael (1969): *Gesellschaft und Geschichte: Zur Kritik der kritischen Theorie*, Walter de Gruyter & Co., Berlin.

上野成利 (2004):「ホルクハイマー――批判的社会理論の射程」、藤原保信、飯島昇蔵編『西洋政治思想史・Ⅱ』、新評論、181-198 頁.

――――(2014):「フランクフルト学派――唯物論のアクチュアリティ」、齋藤純一編『岩波講座 政治哲学 5 理性の両義性』、岩波書店、3-27 頁.

Wellmer, Albrecht (1973): *Kritische Gesellschaftstheorie und Positivismus*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.

Wiggershaus, Rolf (1994): *The Frankfurt School: Its History, Theories and Political Significance*, Michael Robertson (trans.), Polity Press, Cambridge.

――――(2014): *Max Horkheimer: Begründer der "Frankfurter Schule"*, Societäts Verlag, Offenbach am Main.